

〔支出〕

会報印刷費	555,000
会報発送費	126,330
封筒印刷費	20,000
通信費	49,190
文具費	8,460
その他	7,500
<hr/>	
合計	766,480
次年度繰越金	482,537

II. 審議事項

1. 1989年度事業

- ・会報発行 No.35 (3月), No.36 (6月)
No.37 (9月), No.38 (12月)
- ・全国集会 7月29～30日 (松江市)
- ・会員名簿作成

2. 1990年度全国集会開催地

- ・新潟市にて行うことに決定

3. その他

来年は、牧野富太郎博士によるムジナモ発見100周年にあたり、その記念碑をつくる事業が進められている。当会としてもこれに協力することが決定された。

本会報の39～40ページに「趣意書」ならびにムジナモ発見の経緯にふれた文書を掲載しています。御賛同される方は一口でも二口でも御協力下さい。送金は下記口座への銀行振込を望むとのことです。

〈送金先〉東京都商工信用金庫江戸川駅前支店

普通 28-0054938

ムジナモ記念碑をつくる会

代表 中川 巖

〈送金締切日〉平成2年3月末日

○中沢信午著『マリモはなぜ丸い』（中公新書、1989年7月、178頁、520円）

マリモに関し本誌にも何度か寄稿されている中沢信午先生が、おもしろい本を出版された。マリモと言えば阿寒湖を思い浮かべるが、この藻類は国内でも10余りの池沼から記録されている。しかし、美しい球状をなすのは阿寒湖のマリモだけである。欧米にも“マリモ”と称されるものはあり、話題はその正体に広がる。その中でも真に球状のマリモが産したオーストリア・ツェラー湖におけるマリモ絶滅の跡が、筆者の調査行の記録とともに紹介される。

話は、阿寒湖のマリモはなぜ丸いのかという問題に移り、さまざまな仮説とそれを検証するための実験の結果を紹介して、球形マリモの成因にせまる。土産物屋やデパートで売られているマリモと阿寒湖のマリモとは、全く別のつくりをもったものであることも明かされている。このようにマリモの謎にせまりながら、球形マリモ最後の生育地となった阿寒湖の将来も決して楽観できないことを訴え、永遠にマリモを残してゆくための方策について、著者の考えを述べている。全体を通じ平易で興味深く書き進められており、マリモを知るための好著となっ

ている。

○渡辺定路『福井県植物誌』（自費出版、1989年2月、416頁+58図版、7,000円）

本書は、福井県に自生する全ての植物（シダ植物以上）を網羅することを第一の目的として完成された植物誌である。その基礎になった標本の大半の採集と原稿の執筆は著者ひとりの手になるというから敬服する。内容は58枚の図版（一部はカラー、大半はモノクロ写真）につづき、地質・地形、気候、植物相の成り立ちなどを概説したあと347ページにわたる植物目録がまとめられる。この目録には標本産地と種の特徴が手短かに付記されている。水草に関しては、エゾヒルムシロなど2、3気にかかる種もあがっているが、よく標本も採られているように福井県下の産状の概略を知ることができる。

（角野康郎）